



TITLE:

「徹底的に被投的な企投」ーハイ  
デガーの自己批判と問いの不断性(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

中川, 萌子

---

CITATION:

中川, 萌子. 「徹底的に被投的な企投」ーハイデガーの自己批判と問い  
の不断性. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20453>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	中川 萌子
論文題目	「徹底的に被投的な企投」—ハイデガーの自己批判と問いの不断性		
(論文内容の要旨)			
<p>前世紀ドイツの哲学者、M. ハイデガーは、古代ギリシア以来の存在の問いを伝統的形而上学とは異なる仕方で設定し直そうとした。だがその試みには、形而上学の本質を見極め、それと闘うという相当な困難が伴った。こうしたハイデガーの努力が最も鮮明に表われているのは、彼が形而上学的傾向を他ならぬ自分自身の中にも認め、自己批判を加えながら己が思索を変様させていく過程においてである。かくて彼の思索は単純な「一本道」ではありえず—そのつどの自己吟味によって（時として形而上学の道を我知らず突き進んでしまっていた）「過剰な歩み」から「退歩」し、そしてまた「戻り道が初めて前へ導く」という仕方で—行きつ戻りつしつ、絶えず途上に留まっている歩みの軌跡として生じる「諸々の道」とならざるをえない。</p> <p>そしてハイデガーの「存在の思索」に認められる前述の途上の性格は、存在に対する人間の関わりを構成している主要契機である「被投的な企投」（或る特定の状況下に既に投げ込まれていながらも、そこにおいて可能性の次元を切り開き、自らのありうべき有り様を絶えず先取りしている我々のあり方）に関する彼の見解の変遷と密接に関連している。ハイデガーの自己批判を通して、この被投的な企投がいかにして「徹底的に被投的な企投」へと変貌するに至ったかを追跡し、それにより、従来の先行研究を以てしても未だ十分に闡明されているとは言えぬハイデガー哲学の全貌を詳らかにすること、これが本論文の目的である。</p> <p>第一章では、『存在と時間』における存在問題の設定の独自性が、現存在の被投的な企投という観点から明らかにされる。存在の自明性や世界の有意義性を支えているところの現存在の日常的な企投は、不安の襲来において当の現存在の被投性が露わにされ、その中断を余儀なくされるに至って初めて、「存在の問い」を殊更に問うことへと転ずるようになる。これがハイデガーの「存在の思索」の最初の歩みである。</p> <p>第二章では、『存在と時間』以後の議論の展開とその内在的な難点の所在が、ハイデガー自身の後年の自己批判を基に詳論される。まず、同書が試みた時間論は、それが現存在の脱自的存在を明らかにする限りでは存在問題の考察に寄与するものの、とはいえ他方ではこうした脱自的存在をともしれば即自存在に引き戻す危険性を孕んでいることが明らかにされる。次いでこの即自存在への退行は「超越論的地平」の成立と関連しており、そしてその背景にはく被投的な企投における被投性の契機の後退（或いは企投の過度の優位）&gt;という事態が伏在していることが指摘される。これこそはまさに、ハイデガーの「存在の思索」が（それ自身が本来批判せんとしている）形而上学の立場へ皮肉にも接近した「過剰な歩み」に他ならない。</p>			

第三章は、ハイデガーの存在の思索における「転回への跳躍」がいかにして生ずるに至ったかを論ずる。その経緯を要するに、「決定的な歩み」であったと後年自ら回顧することになる論文「真理の本質について」において、彼は<形而上学的な存在了解たる「現前性」の自明性を揺るがしうる「覆蔵性」への被投性>という、従来よりも深化を遂げた被投性の洞察に行き着き、そしてそのことが彼の思索を<存在から存在者へ>という新機軸へ「転回」せしめる萌芽になったのである。

第四章では、この「転回」が『哲学の寄与論稿』において更に「性起における転回」として捉え直されることに伴い、現存在による存在の企投は存在そのものによる「企一投」へと、また被投性は「存在の歴史」の中への被投性に変容していくことを論ずる。

第五章ではハイデガーのニーチェ批判を扱う。この批判の要点は、ニーチェがプラトニズムから脱却しようとして却ってこれに決定的に巻き込まれてしまい、「存在の問い」の遂行が一層困難になったという洞察にある。だが申請者の見るところ、「最初の原初」（形而上学の開始）から「別の原初」（最早形而上学的ではない新たな思索）への移行という存在の歴史の見取り図において、ニーチェの哲学を「形而上学の完成」として位置づけつつも、独り自らのみは形而上学の旧弊を免れていると嘯いているふしがあるハイデガーもまた、釈迦の掌上に翻弄される孫悟空よろしく、尚も形而上学的思考に搦め捕られたままである。事実ニーチェ解釈の進展につれて、ハイデガーは自らの思索の二分法的傾向に批判的になり、形而上学の両義性を新たに認めるようになるのである。

第六章では、ハイデガーの根拠論の変遷という観点から、これまでの議論を総括することを試みる。それにより後期のハイデガーは、企投優位の根拠づけという前期の立場のみならず、「別の原初」への歴史的転回を根拠づけんとする中期の立脚点をも放擲して—「存在は戯れるから戯れる」という表現に如実に示されるが如き—いわば<根拠づけならぬ根拠づけ>を説くに至った所以が詳らかにされる。

最後に結論において、ハイデガーの思索の道が、「過剰な歩み」としての被投性を軽減する企投、「退歩」としての被投性の受け取り直し、そして「別の道を拓く試み」としての徹底的に被投的な企投から構成されるところの「諸々の道」であったことが確認される。

(論文審査の結果の要旨)

ハイデガーの哲学は、前・中・後期の時期毎に千変万化の趣があることは夙に知られている。それでは故常を主とせず、変幻して已まぬその思索の推移は何処に由来するのか。そして彼の哲学を一つの長大な変奏曲に擬えることが許されるのであれば、かくも起伏に富んだ変遷にも関わらず、種々の変奏を貫道している同一の主題とは何であるのか。ハイデガー思想の研究者は誰しも多かれ少なかれ、こうした問いを突き付けられることになる。

本論文は、専門分業化の一途を辿っている今日のハイデガー研究の大勢に抗するか如く、如上の難題に正面から真摯に答えんとする古式ゆかしい研究である。

本論文における申請者の根本的な企図は以下の如きものである。すなわち申請者の狙いは、ハイデガーの終生の問題である「存在の問い」が、彼がその都度行った自己批判を通して深化していくさまを追跡することで、当該哲学の全貌を統一的に把握することにある。その為に申請者は、存在の問いを<存在を問うこと・問いつつ存在すること>と(いうなれば動名詞的に)受け取り直し、次いでこれを更に<被投的企投>と捉え返すことにより、前述した存在の問いの深まりを被投的企投の徹底化として記述しようとする。そして申請者の主張によれば、そのような被投的企投の先鋭化を促進することになったハイデガーの自己批判は、自らの思索に獅子身中の虫として巢食っている形而上学性の超克を目指すものに他ならぬのである。

次に本論文に関して特筆大書に値すると思われる三つの点をそれぞれ屢述していくことにしたい。

まず本論文は、主著『存在と時間』に代表されるハイデガーの前期思想を取り上げ、この時期の彼が存在の問いと被投的企投の関係を如何に考えていたかということに関連文献の緻密な読解を基にして丹念に解き明かしている。周知のように『存在と時間』では、存在の問いが本来問われるべくして未だ然るべく問われていない事態が「存在忘却」と命名され、これが同書の議論の発端をなしている。申請者の分析によれば、この存在忘却の事態は、知らず知らずの中に存在を自明視してしまっている我々現存在の非本来的な有り様にこそ、その淵源がある。そしてこうした現存在の非本来的な存在様態はそれ自体、当該の存在(つまり実存)を構成している二つの契機の間の不均衡—すなわち「企投」の突出と「被投性」の後退—に由来するのである。以上の所見を基に申請者は、ハイデガーの爾後の思索の歩みは<肥大した企投によって滅殺されてしまった被投性が漸次復権していく過程>であると喝破する。この見立ては(実存の第三の構成契機たる)「頹落」を一切無視することによって成り立っている為、異論百出は無論必至であるとはいえ、その反面、敢えて大胆な単純化を施すことでハイデガーの思索の全容を大観せしめる効果を挙げている。これは蓋し「木を見て森を見ず」の通弊に陥りがちな現今のハイデガー研究への不敵な挑戦であろう。

本論文の特色として第二に挙げられるべきは、前述した被投性の復権という独自の観点から、ハイデガー解釈の急所である「転回」問題の解決を試みている点である。その際申請者は、この難問を解く鍵とされる論文「真理の本質について」の議論の精査を通して、被投性理解の新機軸—すなわち、存在の真理の運動という我々には如何ともし難いものの中への被投性—が当該論文において登場していることを見出し、か

かる被投性の新義が一＜存在者から存在へ＞という従来の思索の方向性が今や＜存在から存在者へ＞へと顛倒するに至った事態であるところの一「転回」と密接に連動している消息を説いている。その論述と論旨は共に明暢であり、申請者の如上の立論は一定の説得性を有するものとして評価されうる。

第三に本論文は、中期ハイデガーによるニーチェ批判を取り上げ、これが同時に又ハイデガーの自己批判でもあり、爾後の彼が後期の立場へ向かう道程の起点たりえているという卓見を呈示すると共に、彼の根拠論の変遷の仔細なる追跡を通して一難解を以て鳴るが故に敬遠されがちである一後期思想を果敢に闡明せんとしている。申請者の分析によれば、その要諦は、＜（克服せられるべき）形而上学か、それとも脱形而上学か＞という黒白分明に最早固執することなくして「存在の戯れ」に身を委ね、任運自在たる点に存する。但しそれは自ら考えることを放棄した「何でもござれ」の盲目的な運命随順ではなく、寧ろ形而上学の立場に敢えて留まりつつもそれに決して迎合することなく、形而上学のそれとは別様の存在理解の諸可能性に対して徹頭徹尾開かれてあろうとする姿勢の謂であることには注意を要するであろう。

本論文には一「企投」や「被投性」や「形而上学」といった一議論の鍵概念の真意の立ち入った追究と自らの主張の論証に関して、未だ委曲が尽くされておらぬ憾みがない訳ではない。しかしながら上来述べ来たった如く、本論文における申請者の努力には多なるものがあり、相応に評価せられるべきであろう。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成二十九年一月二十六日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年                      月                      日以降